

女子大学生の友人関係と SNS コミュニケーションの特徴

— 気遣いと心理的居場所感に着目して —

須 藤 春 佳

**The Characteristics of SNS Communication between Female Friends in Adolescence,
Interpreted Through “Thoughtfulness toward Friends” and Possession of “the Sense of *Ibasbo*”
(One’s Own Safe Psychological Space)**

SUDO Haruka

要 旨

本研究では、現代青年の友人関係について、「気遣い」と「心理的居場所感」を切り口に、SNS の一種である LINE でのコミュニケーションの特徴を「反応」と「内心」から検討した。女子大学生を対象に質問紙調査が行われ、結果から、友人への「気遣い」は、「心理的居場所感」や友人への「信頼・安定」の感情と関連していた。クラスター分析により抽出された3群の特徴から、友人に対する心理的居場所感と気遣いのバランスによって、友人との心理的な負荷がかかる場面での反応に異なる特徴が見られた。友人との間で心理的居場所感が高く気遣いは中程度～低い群では、友人へのネガティブな思いも表現して裏表のない友人関係を築いており、心理的居場所感も気遣いも高い群ではやや無理な友人からの依頼にも応じる特徴がみられた。友人との間で心理的居場所感が低く気遣いが中程度の群では、反応と内心にギャップがあることがうかがわれた。友人に対する「気遣い」は、友人間での心理的居場所感が低い場合にはストレスになりえるが、高い場合には関係維持の潤滑油になり、「気遣い」による心理的な負担は友人間での心理的居場所感の高低によって左右されると考えられた。

キーワード：友人への気遣い、心理的居場所感、SNS

Abstract

This study examined friendship in adolescence from the viewpoint of “thoughtfulness toward friends”, “the sense of *ibasbo*”, through responses and inner thoughts when using the LINE social media application. Questionnaire research was conducted with female college students. The results showed that thoughtfulness toward friends was correlated to a sense of *ibasbo* and a feeling of trust and stability among friends. Three groups were created using cluster analysis, with each group showing different characteristics in their LINE communication responses. Members of the group in which sense of *ibasbo* was high expressed their negative feelings honestly to their friends, whereas in another group where thoughtfulness towards friends was equally as high as sense of *ibasbo*, they responded helpfully to their friends’ unreasonable demands. In the group where the sense of *ibasbo* was low and thoughtfulness towards friends was moderate, they showed an inconsistency between their responses and their inner thoughts. It thus appears likely that thoughtfulness toward friends can be stressful when the sense of *ibasbo* is low, but a high sense of *ibasbo* can help smooth friendships.

Keywords: thoughtfulness toward friends, the sense of *ibasbo*, SNS

I. 問題・目的

青年期において、友人関係は心理的な親離れと自己形成を促す重要な人間関係の一つであると考えられるが、現代青年の友人関係の特徴について、岡田（2011）によると、従来の青年心理学が記述してきたような、相手に対する絶対的な共感や互いの内面を開示するような深い関わりを持つもの（「内面的友人関係」）ではなく、関係が希薄化し、内面を開示し合うことを避け、互いに傷つけ合わないよう気を遣った関わり方をするといった傾向が指摘されている。岡田（2011）では、青年を対象に友人関係の類型化を行ったが、そこでは友人関係を避け相手を傷つけることを配慮しない「関係回避群」、傷つけられる懸念を持たず内面を開示する関係を持つとする「内面関係群」、傷つけ合うことを恐れながら快活な態度を示す「気遣い・群れ関係群」に分かれた。そして、内面関係群は、友人に傷つけられることを回避せず、葛藤を通して親密な対人関係を維持・進展させることができ、自尊感情が高かったが、関係回避群は他群よりも自尊感情が低く、気遣い・群れ関係群では関係回避群より自尊感情が高いという結果が出ており、友人との付き合い方が青年自身の心理的健康と関連することを示している。また、社会学者の土井（2004）は、現代の若者における「優しい関係」を指摘しており、青年たちにとって親密圏内の付き合いである友人関係においては過剰な配慮がなされ、人間関係の対立を回避するため、関係の維持に神経を遣うような関係が展開されていると言う。土井（2014）では、現代青年の「身近で閉じられた狭小な人間関係への依存」、すなわち身近な友人関係への依存を指摘しているが、現代の青年は身近な友人関係を自身の心理的な拠り所とする傾向が強いがゆえに、友人に対して過剰な配慮をする傾向にあるのではないかと考えられる。

以上より、現代青年の友人関係を考えるにあたり、青年が自分の内面を開示し深い友人関係を持てるか否かを定めるものとして、ありのままの自分を友人に見せることができるかどうかに関わると考えられる。同時に、互いを傷つけないように気遣いをするかという点も、重要な視点になると考えられる。また土井（2014）の指摘にあるように、現代の青年は身近な友人関係を自身の心理的な拠り所とする傾向が強いと考えられ、この点を検討することも重要と考える。よって本研究では、現代青年の友人関係において、内面を開示し合う深い関係への志向性および友人関係を自身の心理的な拠り所とする傾向と、関係維持のための配慮や気遣いをする志向性がどのように関連するのかを調べるため、第一の目的として「ありのままの自分を友人に見せるか」、「友人関係を心理的な拠り所とするか」、「友人に対して気遣いをするか」という点から現代青年の友人関係の特徴を検討することとした。則定（2007/2008）は、親からの分離と自立へ向かう移行期となる青年期には「居場所」の存在が重要となるが、居場所の中でもその心理的な側面に着目した「心理的居場所」を提起し、心理的居場所があるという感情のことを「心理的居場所感」と定義した。「心理的居場所」とは「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」と定義され、「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」の4概念からなるとしている。本研究では、「ありのままの自分を友人に見せるか」、

「友人関係を心理的な拠り所とするか」を抽出する上で、「心理的居場所感」(則定：2007/2008)が友人との間でどの程度当てはまるかを検討することが妥当であると考え、友人関係における「心理的居場所感」尺度(則定, 2007)を用いることとした。また「友人に対して気遣いをするか」を測定するにあたり、満野(2015)の「気遣い」の概念に基づき「気遣い尺度」を用いることとした。満野(2015)によると、友人関係における「気遣い」は2因子から成ると仮定され、一つは「相手および相手との関係のために行われる向社会的行動」であり、友人が困っている時に手助けすること、親交を深めるために相手を自宅でもてなすことなどの行動を指す(向社会的気遣い)。もう一つは、友人に対して本音があるが、言うとはトラブルになり自分も傷つくので、あえて言わないといったような「行動に表れない思いやり」を指す「自己防衛および関係維持のために本心を隠す抑制的行動」と定義された(抑制的気遣い)。特に後者の「抑制的気遣い」は、岡田(2011)の示す「相手を傷つけないように配慮する」特徴や、土井(2004)の示す、友人関係の維持にエネルギーを注ぐ現代青年の姿と密接に関連すると考えられるため、用いることとした。また、前者の「向社会的気遣い」は岡田の研究では取り上げられていなかった気遣いの適応的な側面について検討するために用いることとした。さらに、本研究では、「心理的居場所感」や友人への「気遣い」が、友人へのどのような感情から引き起こされるのかを調べたいと考え、友人への感情的側面尺度(榎本, 1999)を用い、「心理的居場所感」と、友人への「気遣い」との関連を調べることとした。仮説としては、以下を想定した。「心理的居場所感」の中の「本来感」「被受容感」「安心感」が高いほど、ありのままの自分を友人に示すことができるため、友人への「抑制的気遣い」が低く、友人への信頼感や安心感は高いと考えられるため、友人への感情(榎本, 1999)の中の「信頼・安定」が高く、「不安」は低い(仮説①)。また「心理的居場所感」が高ければ友人との関係を大事にするため「向社会的気遣い」が高い(仮説②)。

ところで、近年急速に普及している SNS (Social Networking Service) は青年期の友人関係のなかで大きな役割を果たしているが、SNS を使っていつでも友人とコミュニケーションが取れるようになったことで、24時間友人関係を維持するのにエネルギーを注ぐ傾向に拍車がかかっていると考えられる。特に、SNS の一種である LINE (ライン) については、「見知った相手との関係をさらに濃密にする手段として、より駆使される傾向が強まっている」(土井, 2014) とされ、青年たちが日常の人間関係から外されないためにネットに接続し続けており、彼らの身近で閉じられた狭小な人間関係への依存を問題視している。このように LINE の利用のされ方は現代青年の友人関係の特徴を捉える上で有用であると考えられる。SNS を扱った先行研究では、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求からみた青少年の SNS 利用行動(加藤, 2016)や、SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス(岡本, 2017)等もあるが、これらは SNS 利用の数量的側面(メール送受信数、アクセス数等)や、SNS 利用時のストレス内容を測定している。時岡ら(2017)は、高校生を対象に、LINE でのやりとりに対する認知に対して友人関係のあり方が及ぼす影響について調べたが、そこでは友人から傷つけられることへのおそれ、LINE でのやりとりへのアンビバレントな気持ちを生む一因であることが示唆され、友人関係の特徴と LINE でのやりとりの関連が示された。また田附ら(2019)では、LINE の既読

をめぐる葛藤場面で生じる青年の心理の特徴について自由記述形式の質問紙を用いて検討しており、既読無視場面で推測される相手の気持ちについて、青年後期にあたる人々は、青年前期に比べて「戸惑い」が少なく、「気遣い」や「罪悪感」が多いという傾向が見られた。この研究では、青年の LINE コミュニケーションにおける心理について、質的側面を含めた検討が行われているが、主に既読無視という葛藤場面での心理に焦点が当てられており、現代青年の友人関係の特徴と、友人間での LINE のやりとりについて、反応を返すか返さない（無視する）かも含めた、SNS 上での会話（コミュニケーション）の質的な特徴について、調べられたものはみられない。さらにこれまでの友人関係研究では、質問紙尺度を用いたものが多く、投影法的手法をとるものは数少ない。よって本研究では、高嶋ら（2007）および畑中（2016）を参考に、投影法的手法で友人間の LINE のコミュニケーション場面を設定し、そこでの反応や内心の思いを尋ねることで、対象者が直観的にとるであろう反応と内心を引き出し、その質的な特徴を捉えることを目的とした。

以上より、本研究では、青年自身がどのような友人関係をもっているかを、「ありのままの自分を友人に見せるか」、「友人関係を心理的な拠り所とするか」、「友人に対して気遣いをするか」という点から捉え、それにより友人間での SNS 上でのコミュニケーションの特徴も異なると考え、友人関係の特徴と、SNS を通じた友人間のコミュニケーションの特徴との関連を探索的に調べることを第二の目的とした。具体的には、友人との間で心理的に負荷がかかる場面を設定し、LINE 上での反応（返信内容）および内心（返信内容の背景にある思い）を尋ねることとした。仮説としては、「心理的居場所感」の高い人は、ありのままの自分を友人に見せるため、心理的負荷をかけた友人に対して自身の率直な思いを伝え（仮説③）、「気遣い」をする傾向の高い人は、友人の思いや要求に添った反応をするのではないかと考えた（仮説④）。また、これまでの友人関係研究においては性差も指摘されており、男性より女性の方が関係志向的であることがわかっている（榎本, 1999 他）。本研究では、探索的に女子青年の特徴を捉えるため、女性の友人間での LINE を介したやりとり場面を設定し、女子青年を対象として、①友人間での LINE を介したやりとり場面での反応と内心、②友人への気遣いの程度、③友人間での心理的居場所感、④友人への感情、を調べ、①～④の関連を検討することとした。

II. 方法

(1) 青年版心理的居場所感尺度（則定, 2007）

5 件法 20 項目。項目は 4 因子から成り、「本来感」因子（「友人と一緒にいると、ありのままの自分を表現できる」「友人と一緒にいると、自分らしくいられる」他 2 項目）、「役割感」因子（「友人の役に立っている」、「友人の支えになっている」「友人に対して、自分にしかできない役割がある」他 3 項目）、「被受容感」因子（「友人に無条件に受け入れられている」「友人と一緒にいると、ここにいていいのだと感じる」他 4 項目）、「安心感」因子（「友人と一緒にいると、ホッとする」「友人と一緒にいると、居心地がいい」他 2 項目）から成る。

(2) 気遣い尺度（満野・今城, 2013）

7 件法 26 項目。項目は 2 因子から成り、友人が困っている時に手助けする、親交を深めるた

めに相手を自宅でもてなす等の行動からなる「相手および相手との関係のために行われる向社会的行動」（「友人が悩んでいるようだったので、話を聞く」「友人が授業を休んだので、レポートなど出ている課題を教える」他10項目）と、友人に対して本音があるが、言うトラブルになり自分も傷つくので、あえて言わないといった行動や、行動に表れない思いやりを指す「自己防衛および関係維持のために本心を隠す抑制的行動」（「友人と話している時、友人を否定しなくなっても言わないで置く」「友人が言われたくなさそうな事は言わないで置く」他12項目）が含まれる。


（3）友人への感情的側面尺度（榎本, 1999）


友人への感情的側面を測る尺度として作成された。全25項目からなり、友人を信頼し、かつ友人との間で安定感を保った肯定的な感情を中心として抱いている「信頼・安定」因子（「心から友達を親友と言える」他7項目）、友人との関係を意識するがゆえに友人に対して不安を感じている「不安・懸念」因子（「自分が友達にどう思われているか気になる」他6項目）、友人に自分の言いたいことはきちんと伝え、友人と一緒にいるときも自分を確立している「独立」因子（「友達と一緒に居ても自分の意志で行動している」他2項目）、友人に対してライバル意識を感じている「ライバル意識」因子（「友達には様々な点で負けたくない」他2項目）、友人に自分のやりたいことや思っていることを伝えられず、友人との間で自分が確立していない「葛藤」因子（「友達の誘いを断れず困る」他3項目）からなる。


（4）LINE 場面質問紙

畑中（2016）を参考に作成した。女子大学生のA子（以下A）とB子（以下B）（友人同士）がLINE（SNSの一種）でやりとりする場面を設定し、吹き出しを設けて①どのように返信するか（反応）、②①のような返信をしたAは内心ではどのように思っているか（内心）を記述するよう求めた。場面設定については、いずれもBからAに心理的な負荷がかかる場面を設定した（場面1：テストを控えたAが、就寝前にBに相談を持ち掛けられる場面、場面2：AとBが待ち合わせの連絡をしていた際、Bの返信が突然途切れ、間が空いてから連絡が来る場面、場面3：Aが翌日にテストを控え就寝しようとしている時、Bからテストのレジュメを送ってほしいと依頼が来る場面）。教示は次の通りであった。「A子さんとB子さんは、それぞれ同じ大学に通う同級生で、親しい友人同士です。以下に、2人のLINEのやりとりに関する場面が3つ出てきます。それぞれの場面について、質問①～②に答えて下さい（回答は思った通りに自由に答えてもらって結構です）。」①ではAの返信内容（以下反応と示す）を吹き出しに書いてもらい、②では①のような返信をしたAの内心を自由に記述してもらった（場面の具体例を図1に示す）。このような方法で対象者にAの返信内容を求めたのは、投影法のP-Fスタディに準じる形で顕現水準の行動（Rosenzweig, 1950）を抽出しようとしたためであり、「あなたならどのように答えますか」ではなく、Aの反応として尋ねることにより、より率直な回答が得られると考えたためである。Rosenzweigによる顕現水準の行動とは、被検者の日常生活の実際場面に対応するような観察可能な行動を指し、被検者のおおまかな行動サンプルを提供するとされる。本研究では、調査対象者が記入したAの返信内容や内心に、対象者自身の行動および気持ちの動きが表れていると考え、分析対象とした。

1. A さんが翌日にテストを控え、早めに就寝しようとしているとき、B さんから次のような LINE が送られてきました。

A 子  23:30
既読
明日テストやし、もう寝るわ～

23:31
既読
あ、ちょっと相談があるんやけど・・・ B 子 

A 子 

① A さんはどのように返信すると思いますか？吹き出しに回答してください。
返信しない場合は「返信しない」を、スタンプを送る時はそのスタンプ（簡単な絵で結構です）を書いてください。

② ①のような返信をした A 子さんは、内心ではどのように思っていると思いますか？

図 1. LINE 場面質問紙の例（場面 A）

(1)～(4) を近畿圏の大学に通う女子学生100名（平均年齢：平均年齢20.2歳、SD = 0.85）を対象に実施した。

(5) 倫理的配慮

調査への回答は匿名で行われ、得られた結果は数量的に処理された後、研究用資料としてのみ用いる旨の説明を表紙に記入した。また、表紙に調査協力への同意の意思を問う記述欄を設け、「同意する」に○を付けた協力者を対象に調査を実施した。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の分析

(1) 「青年版心理的居場所感尺度」（以下「心理的居場所感尺度」と示す）、「気遣い尺度」の得点の基礎統計量を表 1 に示す。また、各下位尺度の下位因子ごとに得点を算出し、それぞれの相関係数を求め、関連性を調べた（表 2）。その結果、心理的居場所感尺度の下位尺度得点と「向社会的気遣い」得点は有意な中程度の相関があり、「被受容感」得点は「抑制的気遣い」得点と有意な弱い相関があった。

(2) 「友人への感情的側面尺度」について、因子分析を行ったところ、4 因子を得た（主因子法、バリマクス回転、累積寄与率は50.85%）。先行研究に倣い、項目内容から因子 1 は「信頼・安定」、因子 2 は「不安・懸念・葛藤」、因子 3 は「独立」、因子 4 は「ライバル意識」と命名した。この尺度の各因子得点と、「心理的居場所感尺度」「気遣い尺度」との相関係数を求

表 1 . 各尺度の記述統計量

| 尺度名 | n | 得点範囲 | 平均値 | SD | 中央値 |
|-----------------|-----|--------|--------|-------|-----|
| 心理的居場所感尺度 (合計点) | 100 | 20-100 | 77.94 | 13.46 | 77 |
| 気遣い尺度 (合計点) | 100 | 25-175 | 133.34 | 15.25 | 131 |

表 2 . 「心理的居場所感尺度」、「気遣い尺度」、「友人への感情的側面尺度」の尺度間の相関係数

| | 心理的居場所感尺度 | | | | | 気遣い尺度 | | | 友人への感情的側面尺度 | | | |
|---------------|-----------|--------|--------|--------|--------|-------------|------------|--------|-------------|---------------------|--------|---------------------|
| | 本来感 | 役割感 | 被受容感 | 安心感 | 合計 | 向社会的 気遣い | 抑制的 気遣い | 合計 | 信頼・安定 | 不安・懸念・ 葛藤 | 独立 | ライバル 意識 |
| 本来感 | 1 | .686** | .759** | .798** | .887** | .519** | -0.018 | .280** | .618** | -0.176 [†] | .393** | -0.228* |
| 役割感 | | 1 | .713** | .590** | .825** | .517** | 0.112 | .365** | .531** | -0.042 | .246* | -0.085 |
| 被受容感 | | | 1 | .747** | .942** | .542** | .239* | .463** | .653** | -0.152 | .238* | -0.197 [†] |
| 安心感 | | | | 1 | .877** | .634** | 0.139 | .448** | .668** | -0.006 | .413** | -0.200* |
| 心理的居場所感 合計 | | | | | 1 | .621** | 0.165 | .458** | .688** | -0.112 | .347** | -0.193 [†] |
| 向社会的気遣い | | | | | | 1 | .326** | .778** | .522** | 0.01 | .333** | -0.119 |
| 抑制的気遣い | | | | | | | 1 | .847** | .244* | -0.031 | -0.12 | -0.073 |
| 気遣い合計 | | | | | | | | 1 | .455** | -0.018 | 0.11 | -0.116 |
| 信頼・安定 | | | | | | | | | 1 | 0.002 | 0.07 | -0.025 |
| 不安・懸念・葛藤 | | | | | | | | | | 1 | -0.12 | 0.087 |
| 独立 | | | | | | | | | | | 1 | 0.000 |
| ライバル意識 | | | | | | | | | | | | 1 |

**… p < .01 *… p < .05 †… p < .10

めたところ、心理的居場所感尺度（合計点および各下位尺度）と「信頼・安定」因子、気遣い尺度（合計点および向社会的気遣い得点）と「信頼・安定」因子とは有意な中程度の相関があった。次に、心理的居場所感尺度（安心感、本来感）と「独立」因子、気遣い尺度（向社会的気遣い得点）と「独立」因子とは有意な中程度の相関がみられた。さらに、心理的居場所感尺度（安心感、本来感）と「ライバル意識」因子とは有意な弱い相関があった（表 2）。

2. 類似のグループの抽出

「心理的居場所感尺度」と「気遣い尺度」ともに対象者の平均値が高かったことから、平均値や中央値を基準に群分けを行うのではなく、総得点をもとに類似の傾向を示す対象者に群分けすることが妥当であると考え、クラスター分析（Ward 法、平方ユークリッド距離）により 3 群を抽出した。そして、グループごとに、「心理的居場所感尺度」「気遣い尺度」「友人への感情的側面尺度」の得点の高低を、1 要因 3 水準の分散分析により検定した（表 3）。その結果、グループ 1 は、心理的居場所感が低く、抑制的気遣いが中程度、向社会的気遣いが低い群、

表3. グループ別にみた「心理的居場所感尺度」、「気遣い尺度」、「友人への感情的側面尺度」の尺度得点、
「友人への感情的側面尺度」の因子得点

| 尺度名と因子名 | | グループ1 (n = 33) | グループ2 (n = 27) | グループ3 (n = 40) | 分散分析結果 | 多重比較結果 | |
|---------------|----------|-------------------|-------------------|-------------------|-----------------|--------------------------|-----------|
| 〔心理的居場所感尺度〕 | 本来感 | MEAN SD | 12.61 3.152 | 16.78 2.722 | 17.13 3.115 | F(2) = 23.238 p < .01 | 1 < 2,3 |
| | 役割感 | MEAN SD | 18.94 3.436 | 22.96 3.695 | 24.1 4.419 | F(2) = 16.543 p < .01 | 1 < 2,3 |
| | 被受容感 | MEAN SD | 20 3.428 | 23.59 4.593 | 25.35 3.438 | F(2) = 18.417 p < .01 | 1 < 2,3 |
| | 安心感 | MEAN SD | 14.79 2.559 | 17.93 1.774 | 18.52 1.853 | F(2) = 31.467 p < .01 | 1 < 2,3 |
| 〔気遣い尺度〕 | 向社会的気遣い | MEAN SD | 60.15 6.605 | 70.26 3.928 | 75.28 5.853 | F(2) = 65.026 p < .01 | 1 < 2 < 3 |
| | 抑制的気遣い | MEAN SD | 61.52 5.263 | 53.89 6.985 | 72.5 7.612 | F(2) = 64.285 p < .01 | 2 < 1 < 3 |
| 〔友人への感情的側面尺度〕 | 信頼・安定 | MEAN SD | -.660 .811 | .018 .715 | .522 .870 | F(2) = 19.2 p < .01 | 1 < 2 < 3 |
| | 不安・懸念・葛藤 | MEAN SD | .0614 .8225 | .0683 .9138 | -.0566 .9846 | F(2) = 0.211 n.s. | |
| | 独立 | MEAN SD | -.2528 .9559 | .3323 .5920 | .0140 .8486 | F(2) = 3.712 p < .01 | 1 < 2 |
| | ライバル意識 | MEAN SD | .0958 .8266 | .0240 .9737 | -.0913 .8616 | F(2) = 0.419 n.s. | |

グループ2は、心理的居場所感が高く、向社会的気遣いが中程度、抑制的気遣いは低い群、グループ3は、心理的居場所感が高く、向社会的気遣い、抑制的気遣いがともに高い群であった。3群における「友人への感情的側面尺度」の各因子得点の傾向を調べたところ、グループ1は「信頼・安定」「独立」因子が低く、グループ2は「信頼・安定」因子が中程度、「独立」因子が高く、グループ3は「信頼・安定」因子が高かった。

3. LINE 場面質問紙の回答の分析

反応、内心、それぞれについて、心理学を専攻する学生4名および教員（筆者）1名の複数名で、KJ法を用いて分類カテゴリを抽出した。具体的には、得られた回答を学生と教員で内容が同じ、あるいは類似のもの同士を集めて分類し、分類カテゴリの抽出を行った。その後、得られた分類カテゴリとそこに該当する回答の妥当性について、大学院修了生（心理学専攻）1名に独自で分類してもらい、一致しないものについては協議し決定した。そして分類カテゴリに入る回答の出現頻度の偏りを群ごとに検定した。作成されたカテゴリと各カテゴリに入る回答数、 χ^2 検定と残差分析またはFisherの直接法による検定結果を表4～6に示す（各カテゴリにおいて1群でも度数が0がある場合や5未満が多い場合は統計的検定にかけることが難しくなるためカテゴリ自体を削除するか意味の近いカテゴリに統合を行った）。場面1では、

表4-1. 場面1の反応カテゴリとグループ別人数

| | グループ1 | グループ2 | グループ3 | 合計 |
|----------------------------|-------|-------|-------|-----|
| 1. 内容を確認しようとする (何? どうしたの?) | 28 | 19 | 34 | 81 |
| 2. 相談に乗る (その場で、条件付きで、翌日以降) | 4 | 10 | 13 | 27 |
| 合計 | 32 | 29 | 47 | 108 |

統計的検定の結果: $\chi^2(2) = 4.24$, n.s.

表4-2. 場面1の内心カテゴリとグループ別人数

| | グループ1 | グループ2 | グループ3 | 合計 |
|--|-------|-------|-------|-----|
| 1. B子の要求に対してどうするか | | | | |
| A. 応じる (条件付き、仕方なく、あとでも含む) | 11 | 9 | 17 | 37 |
| B. 保留 (どうしようと悩む、話の内容によって決める)、自分の状況を優先させる | 10 | 9 | 13 | 32 |
| 2. この状況に対する感情的反応 | | | | |
| B子を心配する、状況を把握しようとする、イライラ、面倒に思う、B子を非難 | 11 | 10 | 13 | 34 |
| 合計 | 32 | 28 | 43 | 103 |

統計的検定の結果: $\chi^2(4) = 0.49$, n.s.

表5-1. 場面2の反応カテゴリとグループ別人数

| | グループ1 | グループ2 | グループ3 | 合計 |
|-------------------------------------|-------|-------|-------|-----|
| 1. 受け入れる (いいよ、了解、気にしないで) | 19 | 8 | 23 | 50 |
| 2. 率直な反応 (驚く、絶句、苦笑、心配した、困った) | 10 | 11 | 11 | 32 |
| 3. 受け止める、中立的 (そうだったんだ、仕方ない) | 13 | 7 | 10 | 30 |
| 4. B子を非難 (ひどい、怒り、よくない、しっかりしてほしい、忠告) | 1 (-) | 8 (+) | 5 | 14 |
| 5. 今後の調整 (今どこ? どうする? また会おう) | 6 | 3 | 11 | 20 |
| 合計 | 49 | 37 | 60 | 146 |

統計的検定の結果: $\chi^2(8) = 15.54$, $p < .05$

※残差分析の結果、そのセルの期待度数より有意に多い(+)、有意に少ない(-)を示す

表5-2. 場面2の内心カテゴリとグループ別人数

| | グループ1 | グループ2 | グループ3 | 合計 |
|--------------------------------------|-------|-------|-------|-----|
| 1. B子を思う (安心、心配、不安、事情を理解しようとする) | 11 | 13 | 6 | 30 |
| 2. 中立的 (特に何も思わない、問題ない、仕方がない) | 10 | 7 | 15 | 32 |
| 3. 否定的 (本当か疑う、戸惑う、B子を非難、イライラ、腹立ち) | 17 | 20 | 24 | 61 |
| 合計 | 38 | 40 | 45 | 123 |

統計的検定の結果: $\chi^2(4) = 6.01$, n.s.

表6-1. 場面3の反応カテゴリとグループ別人数

| | グループ1 | グループ2 | グループ3 | 合計 | 多重比較結果 |
|-----------------|-------|-------|-------|-----|--------|
| 1. 送る (その場で、翌日) | 32 | 21 | 37 | 90 | 2 < 3 |
| 2. 送らない、感情的反応 | 3 | 7 | 1 | 11 | 2 > 3 |
| 合計 | 35 | 28 | 38 | 101 | |

統計的検定の結果：Fisher, $p < .05$

表6-2. 場面3の内心カテゴリとグループ別人数

| | グループ1 | グループ2 | グループ3 | 合計 |
|---|-------|-------|-------|----|
| 1. この状況に対して | | | | |
| A. 応じる (送る)、 中立的 (何も思わない、仕方ない、状況による) | 7 | 5 | 14 | 11 |
| B. 応じない、 自分の都合を優先 (面倒、早く寝たい) | 13 | 11 | 16 | 40 |
| 2. B子に対しての思い | | | | |
| A. 心配、お互いさま | 6 | 3 | 7 | 16 |
| B. あきれ、怒り、非難 | 9 | 10 | 10 | 29 |
| 合計 | 35 | 29 | 47 | 96 |

統計的検定の結果： $\chi^2(6) = 3.28$, n.s.

反応、内心ともに、グループ間で有意な回答数の偏りがみられなかった。場面2では、反応「B子を非難」の出現度数がグループ2で多く、グループ1で少なかった [$\chi^2(8) = 15.54$ $p < .05$]。場面3では、反応「送る」の出現度数がグループ2よりグループ3が多かった (Fisher, $p < .05$)。また「送らない、感情的反応」がグループ3よりグループ2が多かった (Fisher, $p < .05$)。場面1～場面3を通して内心のカテゴリでは回答数の偏りがみられなかった。

IV. 考 察

1. 各尺度の分析から

「心理的居場所感尺度」得点、「気遣い尺度」得点のいずれにおいても、平均値や中央値は、各々77.94、77 (心理的居場所感尺度)、133.34、131 (気遣い尺度)であり、得点範囲の中間点に当たる値 (心理的居場所感尺度:60、気遣い尺度:100)を大きく上回ったことから (表1)、今回の調査対象者は友人関係において居場所感も高く感じていて、かつ気遣いをする傾向も高いことがうかがわれる。また、尺度間の関連を検討した相関分析の結果から、心理的居場所感尺度の下位尺度得点と「向社会的気遣い」得点は有意な中程度の相関があり、「被受容感」得点は「抑制的気遣い」得点と有意な弱い相関があったことから、「心理的居場所感尺度」の内容と「気遣い傾向」は相互に関連し合っていることがわかった。すなわち、友人との間で心理的居場所感を感じている人ほど、友人に対して気遣い (特に向社会的気遣い) をする傾向にあり、「自分が友人に受け入れられている」といった被受容感を感じている人は、自身を抑えてでも友人に合わせる抑制的気遣いをする傾向にあると言える。友人との間でありのままの自分

を出せると感じている人ほど、同時に友人に対して気遣いを行う傾向も高いと言える。よって仮説②は支持され、仮説①は部分的に支持された。心理的居場所感が高い人ほど抑制的気遣いが低いと考えていたが、友人との間で被受容感の高い人は抑制的気遣いも高いことがわかった。

また、「心理的居場所感尺度」「気遣い尺度」と「友人への感情的側面尺度」との関連については、心理的居場所感得点の高い人ほど友人に対する「信頼・安定」得点が高く、「安心感、本来感」得点の高い人ほど「独立」得点が高かったことから、友人との間で心理的居場所感を感じる傾向が高い人は、友人を信頼していること、また友人に対してありのまま安心感をもって接する傾向が高い人は、友人との間でも自分をもって付き合う傾向にあることがわかり、仮説①は一部支持された。また、向社会的気遣い得点の高い人ほど「信頼・安定」「独立」得点が高かったことから、友人のためを思って行動する傾向が高い人は、友人に対して信頼感が高く、友人との間で自分をもって付き合う傾向にあると言える。一方、友人に対して安心感やありのままの自分を出せると感じている人は、友人に対してライバル意識は感じない傾向にある。以上より、友人のことを思って行動する「向社会的気遣い」傾向の高い人は、友人に対して信頼感があり、また自分を抑えることなく友人に対して自分をもって付き合う傾向にあることが示されたことから、友人への「向社会的気遣い」は健康的で適応的な関わり方であると言えるのではないか。さらには「抑制的気遣い」得点の高い人ほど、弱いながらも友人に対する「信頼・安定」が高いという傾向も見られ、友人に対して信頼感を持っている人は抑制的気遣いをする傾向も見られた。これまで防衛的とされてきた抑制的気遣いも友人への信頼感とのつながりが示されたことから、適応的な形で用いられる場合もあると言えるのではないか。

2. 抽出されたグループの特徴

ここでは、クラスター分析によって抽出された3群の特徴を、質問紙尺度の得点の傾向とLINE 場面質問紙への回答の傾向とを併せて検討する。グループ1は、友人との間での心理的居場所感が低く、抑制的気遣いが中程度、向社会的気遣いが低い群であり、友人との間での心理的居場所感が低いこと、自己防衛および関係維持のために本心を隠す抑制的気遣いが優勢であるが向社会的気遣いは低い群である。友人に対する信頼感も、自分をもって付き合うような傾向も低く、いわば友人に対する信頼感が持てずに本音を出すことなく防衛的に友人と付き合い合っている群であると言える。LINE 場面質問紙の回答の傾向としては、友人からの連絡が突然途切れる場面2で、「B子を非難」する反応の出現度数が少なく、友人に対してネガティブな本音を直接伝えない傾向にあり、仮説④が部分的に支持された。この群は、内心ではネガティブな思いを持っていても表出せず、発言と内心にギャップがあることによりストレスを感じているのではないか。

グループ2は、友人との間での心理的居場所感が高く、向社会的気遣いは中程度、抑制的気遣いは低い群であり、ありのままの自分を出して友人と付き合い合えると同時に友人のために行動する傾向が高い一方で、友人との関係維持のために自身を抑制する傾向は低い群である。友人に対して信頼感をもっており、また友人との間で自分を持って付き合うことのできる群でもあ

る。LINE 場面質問紙の回答の傾向は、場面2で「B子を非難」する反応が多かった。場面3では「(レジュメを)送る」がグループ3より少なく「送らない」が多く見られた。これらのことから、本群は友人に対してネガティブな思いを直接伝えたり(場面2)、やや無理な友人からの依頼に対しては応じない形をとる傾向にあると言え(場面3)、友人関係の中で例えそれがネガティブな思いであったり友人の意に添わないことであっても、自身の感情に添った形で友人に伝える傾向にある。友人に対しては自分の思いを抑えることはせず、ありのままの自身の感情を表現しながら付き合っている群であり、内心と反応の間のギャップは少ない群とも言えるだろう。この群の結果より、仮説③は一部支持されたと言える。

グループ3は、友人との間での心理的居場所感が高く、向社会的気遣い、抑制的気遣いがともに高い群であり、友人に対する「信頼・安定」が高かった。友人に対する心理的居場所感も気遣い傾向もともに高く、友人への信頼も高い群である。LINE 場面質問紙の回答の傾向は、場面3では「(レジュメを)送る」反応がグループ2より多く、「送らない」が少なく、やや無理な友人からの要求に対しては、依頼に応じる傾向にあった。この群は、友人との間で心理的居場所感も高く、同時に気遣いも信頼感も高いため、友人との間では波風を立てずに関係を円滑に進めようとする傾向があるのではないかと考えられる。心理的居場所感と気遣い傾向が共に高い群では、気遣いをする傾向がみられることがわかった。

以上、3つの群の特徴を見てきた。各々、友人に対する心理的居場所感と気遣いのバランスによって、友人との間で心理的な負荷がかかる場面での反応や内心にも異なる特徴が見られた。友人との間で心理的居場所感を感じている場合、グループ2のように、友人から心理的な負荷がかけられたことに対するネガティブな思いをありのまま直接表現することで、裏表のない友人関係を築いている群もあれば、グループ3のようにやや無理な友人からの依頼にも応じる気遣いが優勢な群もみられた。これら2群は、友人との間で心理的居場所感が高いがゆえにストレートに感情を表現するのか、気遣いによってネガティブな思いは表出せずに関係維持を重視するのか異なり、各々の特徴が現れたと言える。もっとも、友人との間で心理的居場所感が低い傾向にあった群(グループ1)では、友人から心理的な負荷がかかる場面でネガティブな思いを表現することをしない傾向もみられた。この群は友人との間での心理的居場所感が低く、自身の思いを抑えて友人に気遣う傾向が見られ、内心と表出にギャップを抱えていると考えられるため、心理的な負担は大きいのではないかと考えられる。

V. まとめと今後の課題

本研究では、現代女子青年の友人関係について、「気遣い」および「心理的居場所感」を切り口に、両者の関連を調べるとともに、友人への感情とLINEでのコミュニケーションの特徴との関連を検討してきた。結果から、友人への「気遣い」は、「心理的居場所感」や友人への「信頼・安定」の感情とも密接に関わっていることがわかった。相手との関係維持を重視する「気遣い」の中でも、自身の思いを抑えて関わる「抑制的気遣い」より相手のことを思っ

のであるとは言えないこともわかった。岡田（2011）では、現代青年の友人関係において「自他共に傷つくことがないよう配慮することによって、相手から拒絶されず受容されることを通して、自尊感情の水準を高揚・維持しようとする過程」が見出され、「友人関係の中で気を遣うことは必ずしも否定的な意味だけではなく、青年の自尊感情維持という肯定的な機能を持つ」とも示されている。本研究においても、心理的居場所感が高く「抑制的気遣い」の低い群では、本音を出して友人と付き合う「内面的関係」（岡田, 2011）に近い友人関係も見られたが、向社会的気遣いは行われていた。友人に対する「気遣い」は、友人間での心理的居場所感が低い場合にはストレスになりえるが、心理的居場所感が高い場合には関係維持の潤滑油になると考えられ、「気遣い」による心理的な負担は友人間での心理的居場所感の高低によって左右されると考えられる。全体の特徴として、心理的居場所感の高さと向社会的気遣いを行う傾向は関連し合っており、心理的居場所感の高い青年は友人のために気遣いを行う傾向が示されたが、現代の青年は、友人に対して気遣いを行うことで、友人間の心理的居場所感を高めているのではないとも考えられる。したがって、青年にとってありのままの自分を友人に見せ友人関係を心理的拠り所とする傾向と、友人に気遣いをする傾向は共存するものであると言える。

現代青年の友人関係について、関係への依存が強く、本音でぶつからず表面的であると指摘されているが（土井, 2014）、全ての青年がそうではなく、多くの青年が「気遣い」を潤滑油として友人関係を円滑に結ぶ傾向があるのではないか。今回の調査は女性を対象とした探索的な研究であり、今後は男性も含め対象者数を増やして検討することが課題である。

文献

- 土井隆義（2004）. 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル. ちくま新書.
- 土井隆義（2014）. LINE で閉じる友だちの世界—ネットで狭くなった人間関係—. 教育オピニオン. 明治図書オンライン「教育 Zine」.
<https://www.meijitosh.co.jp/eduzine/opinion/?id=20140176>（2018年2月15日取得）
- 榎本淳子（1999）. 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, **47**, 180-190.
- 畑中千紘（2016）. 大学生の SNS コミュニケーション場面にみられる対人不安とアグレッションの分析—PF スタディ風質問紙を用いて—. 日本箱庭療法学会第30回大会発表論文集, 162-163.
- 加藤千枝（2016）. 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求からみた青少年の SNS 利用. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, **7**, 315-323.
- 満野史子（2015）. 大学生の友人関係における気遣いの研究—向社会的・抑制的気遣いの規定因と影響—. 風間書房.
- 満野史子・今城周造（2013）. 大学生の友人に対する気遣い尺度の作成と規定因の検討. 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要, **22**, 31-46.
- 則定百合子（2008）. 青年期における心理的居場所感の発達的变化. カウンセリング研究, **41**(1), 64-72.
- 則定百合子（2007）. 青年版心理的居場所感尺度の作成. 日本教育心理学会総会発表論文集, 337.
- 岡田努（2011）. 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について. パーソナリティ研究, **20**(1), 11-20.
- 岡本卓也（2017）. SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス. 信州大学人文科学論集, **4**, 113-131.
- Rosenzweig, S. (1950). Levels of behavior in psychodiagnosis with special reference to the Picture-Frustration Study. *Journal of Psychology*, **30**, 139-143.

- 高嶋雄介・須藤春佳・高木綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・山口智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子 (2007). 学校現場における教師と心理臨床家の「視点」に関する研究. 心理臨床学研究, **24**(4), 419-430.
- 田附紘平・松波美里・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・柴田彩花・松井祥可・桑原知子 (2019). LINEの既読をめぐる葛藤場面における青年の心理の特徴. 心理臨床学研究, **37**(1), 16-28.
- 時岡良太・佐藤映・児玉夏枝・田附紘平・竹中悠香・松波美里・岩井有香・木村大樹・鈴木優佳・橋本真友里・岩城晶子・神代末人・桑原知子 (2017). 高校生のLINEでのやりとりに対する認知に現代青年の友人関係特徴が及ぼす影響. パーソナリティ研究, **26**(1), 76-88.

(原稿受理日 2019年8月20日)